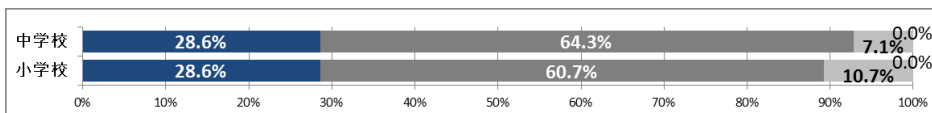


## (2) 令和元年度 1 学期各学校におけるいじめ防止対策の取組状況に係る報告

## ① いじめ防止対策取組状況自己点検シートまとめ

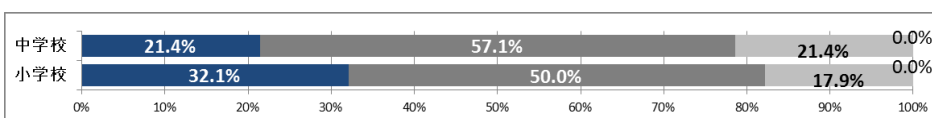
できた 概ねできた やや課題がある 課題がある

## ◆ 互いに認め合い、支え合い、助け合う仲間づくりができたか



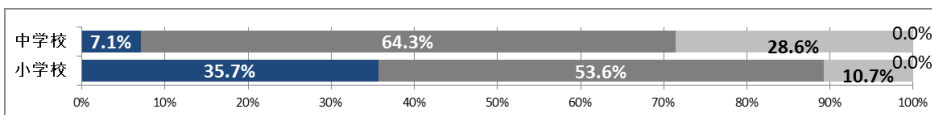
- 縦割り班活動の取組を進め、高学年から低学年までの触れ合いの時間を増やし、協調性の向上を図っている。
- みんな遊びを実施して、子ども同士で関わりあえる時間を創出している。
- ▲ 児童会を主体とした活動を活性化していく。

## ◆ 命や人権を尊重する豊かな心を育むことができたか



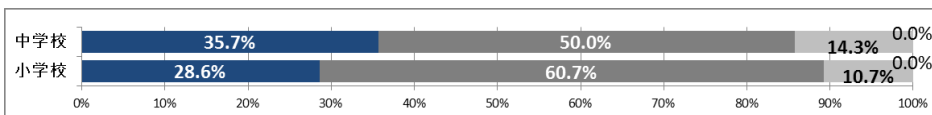
- 道徳教育の充実を図っており、「あいさつ、笑顔、ありがとう」の取組で、生徒指導上の対応が年々減少している。
- 月に1度「道徳デー」として、道徳の副読本を家庭に持ち帰り、保護者と一緒に話し合う機会を設けている。
- ▲ 人権参観日とタイアップして、2学期に重点的に実施予定である。

## ◆ 家庭や地域への働きかけができていますか



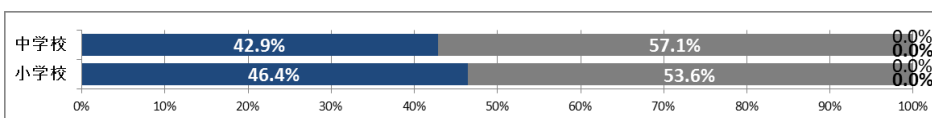
- ネット関係のルール作りをインターネットトラブル防止講座を踏まえて、家族のルール作りについて働きかけ、推進している。
- 学級懇談会に多くの保護者に参加してもらえるように、授業参観の次の授業時間に保護者懇談会を実施している。
- ▲ 啓発チラシ等を配布はしているが、積極的な情報発信までには至っていない。

## ◆ 学校環境適応感尺度「アセス」が適切に活用できているか



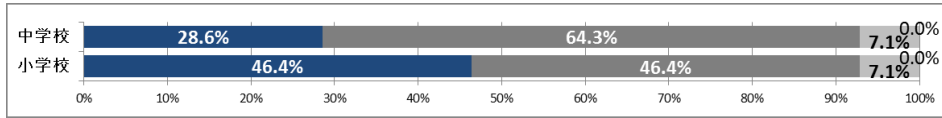
- アセスの結果を検討する会を学年ごとに実施し、情報共有を図ることで、未然防止を心がけている。
- アセスの結果について、取りまとめを行い管理職に報告するとともに、管理職からヒアリングを受けて、対応方針を検討している。
- ▲ 1学期中は、アセスの検討会等の時間確保が困難であったため、夏季休業期間に実施する予定である。

## ◆ 児童生徒の相談行動の促進ができていますか



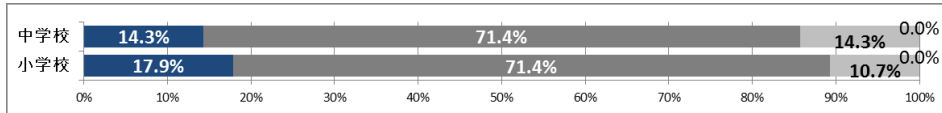
- 相談行動促進(自殺予防教育)リーフレットを活用して自殺予防教育を行った。
- 「心の相談シート」を実施しない月に「○○っ子安心シート」を実施し、教育相談の資料としている。
- 今年度から、希望者を対象とした教育相談日を毎月設定し、学級担任による教育相談を行った。

◆ 双方向（学校家庭間等）からの実態把握と情報共有がなされているか



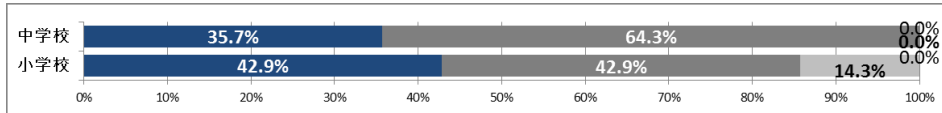
- PTAと協議のうえ有料のインターネット通信サービスに加入した。メール機能だけでなく学校の情報を写真で発信することができるようになり、家族で学校の話が増えたという声をいただいており、学校と家庭の連携が一步進んだと感じている。
- 子どもと保護者が一緒に考えて答えるようなアンケートを作成し、家庭においていじめについて考える機会を作る計画を進めている。
- ▲ 学校長からPTA総会において、いじめ防止を啓発した。2学期以降も参観等で啓発していく予定である。

◆ 研修の充実による教職員の資質と指導力の向上がなされているか



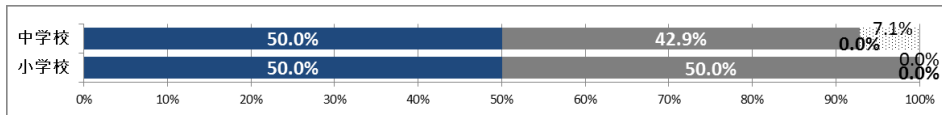
- 相談行動促進(自殺予防教育)研修を講師を招聘して学校で実施し、共通理解を図った。
- いじめに対する認識を変えられるように職員研修に取り組み、些細なことも見逃さない体制を作り基盤づくりをしている。
- 毎月、シリーズ研修と銘打って、定期的に職員研修を実施している。
- ▲ 夏休み後半の研修を校内研修として、2学期に行う予定である。

◆ 「チーム学校」による組織的な対応がなされているか



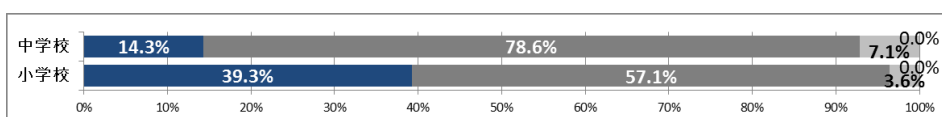
- 職員会議ごとに「特別な支援」「問題行動」「不登校」などの情報を全職員が共通理解できるように時間を設けている。
- 理由が明確でない欠席者には、電話連絡、3日以上欠席は、家庭訪問を行うことを全職員で取り組んでいる。
- ▲ スクールカウンセラーと連携した研修は、夏休みに実施予定である。

◆ 関係機関との連携を強化した取組がなされているか



- 外部講師を招聘して、インターネットトラブル防止講座を児童と保護者向けに実施し、SNS等の利用の際の留意点などを一緒に学習した。
- スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと連携し、気になる子どもへの支援についてケース会議を行った。
- 気になる子どもについて、行政機関、教育委員会、学校、医療がケース会議をもち支援の方針を検討した。
- ▲ 状況に応じて関係機関と連携を図るよう、職員に周知徹底していく。

◆ 推進体制・検証体制を整える取組がなされているか



- 学年担当⇒生徒指導担当⇒管理職という情報伝達経路を確立しており、情報共有の漏れがないように心がけている。
- 12月に学級懇談会を実施し、学級の状況や今後の方針を保護者と確認する計画をしている。
- 自己点検シートを活用して、現状の取組状況を「いじめ問題対策会議」で検証している。
- ▲ 管理職による進捗管理はできているが、なかなか職員を巻き込んだ形で検証する時間が取れない。

## ② 教育相談実施状況まとめ

### ◆ 教育相談実施報告

	小学校	中学校	全体
実施人数 (実施率)	14,365 人 (99.8%)	6,790 人 (98.1%)	21,155 人 (99.2%)
情報件数	922 件	146 件	1,068 件

※各校からの教育相談実施報告書より（1学期分）

### ◆ 教育相談を実施できなかった児童生徒への対応状況

【小学校:33人(0.2%) 中学校:135人(1.9%)】

- ・学級担任が定期的に電話連絡、家庭訪問を行っている。
- ・フリースクールに通う児童には校長が訪問し、相談を行った
- ・児童生徒と会えない場合もあるが、保護者から様子を聞き、状況理解に努めている。

### ◆ 教育相談の実施状況並びに対応状況

※令和元年8月1日～令和元年8月29日に実施した指導主事による各小中学校への聞き取り訪問によるもの

#### ○ 「いじめに関する情報」について ※教育相談により「いじめに関する情報」を知り得た状況

- ・いじめられている子どもからの訴え
- ・子ども本人は気にしていなかったが、相談の中から担任が気付き対応

#### ○ 「いじめ対策委員会」を中心とした組織による対応の状況

- ・事案発生時には小まめにケース会議を開き、関係職員間で情報を共有し、統一感のある指導、援助を行っている。
- ・職員会の後に各学年からの時間を設け、情報共有の機会を持っている。状況に応じて、臨時の職員打ち合わせ（業間休み）を行い、組織で即時対応できるようにしている。
- ・常に対応した事案について記録を残し、時には記録を事例として用いて改善資料とすることで指導方法を見直している。改善点から学校全体の指導体制を見直し、いじめ問題の総合的な取組体制の強化を図っている。
- ・いじめを積極的に認知し、「いじめの見逃しゼロ」を徹底した早期発見・早期対応が教職員間で浸透して、些細なことでも情報共有し、組織として対応している。

#### ○ 教育相談の実施方法の工夫

##### 〈小学校〉

- ・昼休みと放課後を利用した。
- ・心の相談アンケート以外にも毎月学校独自のアンケートを行い、日常観察による見立てとアンケートによる気付きをもとに、積極的に相談を行っている。

##### 〈中学校〉

- ・中間テスト前の3日間を45分×7時間の時間割にして、7時間目を教育相談の時間及びテスト前の自主学習の時間に設定した。
- ・2週間の教育相談週間を設けて、放課後に4名ずつ、副担任が中心となり聞き取りを行った。翌月の面談は学級担任が実施するなど役割を分担して取り組んだ。
- ・学期末に新聞づくりを行う際に教育相談を並行して行い、時間を確保した。また、必要に応じて別室での聞き取りも実施した。

## ○ 教育相談による効果

- ・生徒と教職員の人間関係が深まった。「先生は話を聞いてくれる」と感じている児童生徒が増えている。教育相談週間が生徒たちにとって恒例の行事として定着しており、保護者も肯定的にとらえ、感謝の声も寄せられている
- ・アンケートの定期的な実施をきっかけに、日常の生活ノートにも早期の相談が寄せられるようになり、早期対応につながっている。
- ・教師に言うまでもないと我慢している子の認知につながる。負担感はあるが教育相談を実施したからこそ得られる情報もあり効果があった。
- ・アセスの結果と心の相談アンケート、教育相談の内容、普段の学校生活、部活動の様子など多面的に生徒の様子を観察し、教職員で情報共有を行うことで、生徒一人一人の小さな変化を見逃さない組織的な対応ができています。
- ・嫌がらせや教員の目の届かないところ（下校時や清掃活動中など）の本人のしんどさを知ることができた。

## ○ 今後の課題

- ・生徒が直接自分で解決できないことについて代わりに先生が注意してくれる（懲らしめてくれる）機会であると捉える生徒もいるため、自主性が損なわれている心配も感じている。
- ・生徒がアンケート慣れして、本当のことを書いているか判断することが難しくなっている。
- ・1対1で話を聞くことはとても良い機会ではあるが担任の負担は大きい。
- ・担任と合わない生徒の対応が難しい。
- ・いじめと認知した事案には内容に幅があるが、全ての事案において保護者に報告・連絡すべきなのか。4月に県から配布された「こんなこともいじめになります」の内容のように、どんな些細なことでも保護者に連絡するということに困り感を感じている教職員もいる。

## ○ 各校の特徴ある取組について

### 〈小学校〉

- ・あいさつ運動、褒め言葉のシャワー、「ぽかぽかハート運動」（いいところさがし）を実施している。
- ・児童会を中心に「仲良し集会」を実施している。
- ・今年度のスローガンを児童会が中心になって決め、提案劇を実施している。
- ・縦割り活動（清掃活動・大縄大会・児童集会）を実施している。
- ・ピア・サポート活動を積極的に取り入れている。
- ・人権週間（1週間）を設定し、毎朝、朝の学習時間に人権を取り扱った学習を行い、最終日の金曜日を入権参観日として保護者に公開している。

### 〈中学校〉

- ・生徒会が「いじめ追放宣言」のパンフレットを作り、生徒会が「いじめの定義」を全校生の前で話し、説明する取組を行っている。
- ・ネットいじめを防止するため、のぼり旗を常時あげて未然防止に努めている。
- ・いじめ防止対策について生徒会と校長で話をする機会を設けている。
- ・生徒会活動として「いいところさがし」を全校で行い、友達の良い所をカードに記入し、全校生分を廊下に掲示している。
- ・校長BOXを設置する。

### ③ 学校生活に関するアンケート（アセス）の結果と取組状況について

○ 実施時期 令和元年1学期末までに 各校の実情に応じて実施

#### ○ 対象者数及び結果

		要支援 レベル1		要支援 レベル2		要支援 レベル3		要支援 レベル4		児童生徒 在籍数	実施数	実施率
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合			
小学校	3年	14人	0.6%	86人	3.5%	200人	8.0%	195人	8.0%	2,398人	2,390人	99.7%
	4年	15人	0.6%	102人	4.2%	178人	8.5%	206人	8.5%	2,437人	2,421人	99.3%
	5年	8人	0.3%	56人	2.3%	120人	8.2%	200人	8.2%	2,395人	2,385人	99.6%
	6年	14人	0.6%	71人	2.9%	183人	7.1%	172人	7.1%	2,456人	2,438人	99.3%
中学校	1年	10人	0.4%	51人	2.1%	115人	7.1%	173人	7.1%	2,308人	2,297人	99.5%
	2年	5人	0.2%	57人	2.3%	121人	9.1%	222人	9.1%	2,298人	2,243人	97.6%
	3年	2人	0.1%	74人	3.0%	115人	9.0%	219人	9.0%	2,302人	2,242人	97.4%
計		68人	0.4%	497人	3.0%	1,032人	6.2%	1,387人	8.4%	16,594人	16,416人	98.9%

注) 要支援レベル1…学習、対人関係ともに要支援領域で、生活満足感も低い児童生徒  
 要支援レベル2…学習、対人関係のどちらかが要支援領域で、生活満足感も低い児童生徒  
 要支援レベル3…学習、対人関係は適応領域だが、生活満足感が低い児童生徒  
 要支援レベル4…学習、対人関係、または両方が要支援領域だが、生活満足感が高い児童生徒

#### ○ 「学校生活に関するアンケート（アセス）」実施後の対応について

	事後対応の内容	小学校	中学校
①	学級内分布票から判る支援の必要な子どもについて学年で情報共有できている	100%	100%
②	学級内分布票から判る支援の必要な子どもについて個別支援をしている	100%	100%

#### ○ 支援の必要な子どもへの具体的ななかかわり事例

- ・医療や関係機関においてソーシャルスキルトレーニングを行い、学校としては周囲の児童の理解を高められるよう、サポートできる児童を近くの席に配置したり、協同学習をたくさん取り入れたりするなどの支援の方法を工夫している。
- ・虐待が疑われる場合には家庭支援課との情報共有を密にし、多くの教員で見守りを行っている。
- ・養護教諭が相談窓口になって保護者とも連携し、支援の必要な児童に対してサポートができるように関係づくりを進めている。
- ・複数の教員（担任、管理職、養護、児童支援担当、専科、生徒指導担当）で情報を共有している。個別の専門機関に対応の仕方についてアドバイスをもらい、ケース会議を開いて対応方法を共有している。

#### ○ 「学校生活に関するアンケート（アセス）」の活用についての聞き取り結果から

##### 《工夫・成果・課題》

- ・要支援レベル1という結果が意外な生徒がいたが、本人の困り感を受け止め、自身を持つ

て活動できるような関わりを今後関係職員みんなで考えていきたい。教師の見立てのみでは気づけていなかったと思う。また、気づいたとしても、本人にとっての問題がもっと深刻になってからだったかもしれない。

- 学校として本人の自己有用感を高めていく取組を家庭と連携して行えるよう取り組んでいるが、家庭事情により家庭の協力を得られないケースもあり、難しい部分もある。家庭への支援という点においては、スクールソーシャルワーカーなどと連携しながら抱え込んでしまわないようにチームで対応できるよう体制を整えたい。